

# いのちの授業900日

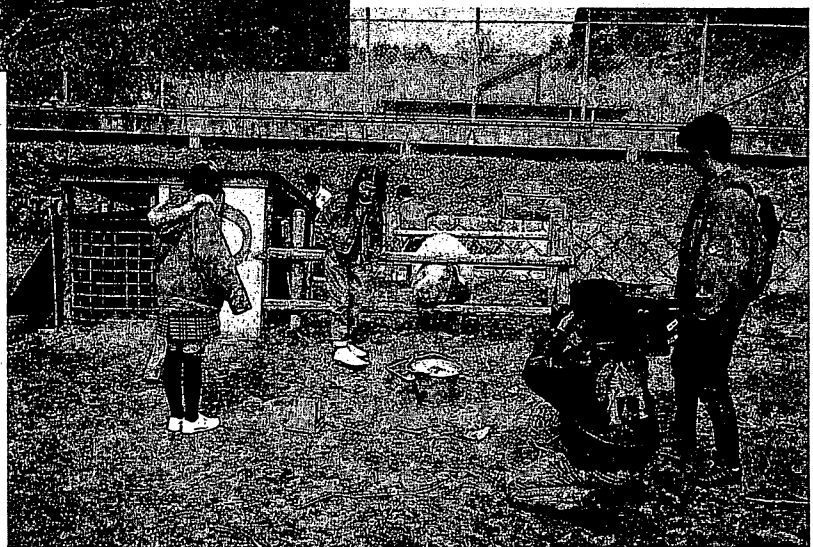
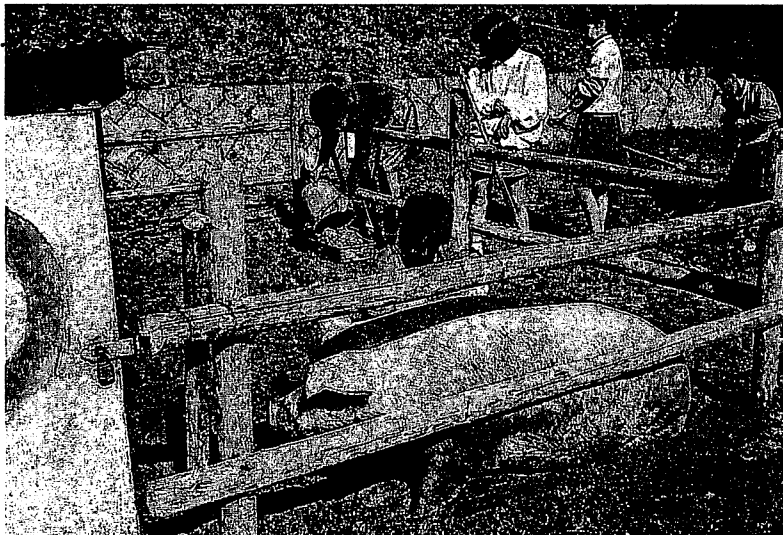
ぶたのPちゃんと32人の小学生

大阪の中心地から車でおよそ1時間、都市化が進む山あいの町の小学校。

4年生の夏、担任の黒田先生の提案で、クラスで豚を飼うことになりました。

先生は、家畜としての豚を育てることによって、食べ物大切さを子どもたちに教えたいと思いました。クラスメイトは32人。ほとんどが、家畜はもちろん、ペットさえ飼った経験も少ない子どもたちです。

豚がやってきたとき、体重およそ25キロ、生後2か月のオス、名前はみんなで考えて、Pちゃん、と、名づけました。



楽しかったこと、苦しかったこと。

豚を飼い続けることで学んだいのちの大切さ。

これは、4年生の夏から6年生の春・卒業まで、1人の先生と32人の子どもたちが、学校で豚を飼育した900日の記録です。

この作品は、小学校のクラスで1頭の豚を2年半にわたって飼育した記録です。先生は豊かすぎる時代に、人間と家畜との関係を、理屈ではなく体で知ってほしいと考え「みんなで豚を育ててその豚を食べよう」という試みを子どもたちにぶつけました。

ちょっと前の時代でしたら、豚を飼育してそれをつぶして食べるということなどどこにでもあること、それが小学校という以外に、とりたてて2年半という歳月をかけて記録するには値しない話題だったに違いありません。しかしこの作品が、みなさんに興味深く見ていただけるようになったのは“今の時代”が一杯詰まっているからだと思います。

今の時代は便利優先時代。スーパーマーケットの食品コーナーには、パックに美しく並べられた切り身ばかりが並び、その商品の本来の姿が見えにくくなっています。牛、豚、鳥などならナントカ想像もつきますが、魚となったらどんな姿形だったのか思い起こすことは困難なことです。「酢ダコが真っ赤な姿で海を泳いでいる」という話をだれも笑えない時代です。

そして舞台となった小学校のある場所は、古くから伝統を引きずった農村社会に、都会の波がどっと押し寄せてきたような町です。

都会と農村——。古い伝統と新しいライフスタイル——。

そんな二つの社会で育った子どもたちが通う小学校、そして保護者たち——。

育てた豚を食べるということに、古くから住んできた農家の人々は至って寛容でした。しかし、都会からやってきた人々は猛反対でした。二つの意見は激しくぶつかり合いました。家畜に対しての知識、経験、そして環境が全く違っていたからです。

「学校で豚を飼いその豚を食べようという試み」を通して、黒田先生の「理屈ではなく、体で知ってほしい」という願いはかなえられました。子どもたちだけではなく、子どもたちをとりまくたくさんの人たちが、懸命に「いのち」というものを考えました。そしてその一人ひとりの姿が作品の中に映し出されています。笑いもあります。涙もあります。そして何よりも真剣さがあふれています。

ふだんナカナカ、考え、話し合う機会の少ない「いのち」について、その「キッカケ」になる作品だと思います。どうぞお楽しみください。

ディレクター

西尚清治

「あなたは、最近、何かに感動して泣いたことがありますか？」

「あなたは、最近、友だちと大げんかをしたことがありますか？」

「あなたは、苦しくても、自分の気持ちに素直に行動したことがありますか？」

「あなたは、あなたの周りの人のことを本当に大切だと感じたことはありますか？」

「そして、あなたは、あなたを、自分のことを好きだと思ったことはありますか？」

Pちゃんという豚と共に生活をした期間、私たちは、そんなことを何度も考えさせられました。Pちゃんの毎日の世話のとき、小屋が壊れて増築するとき、そして、卒業を間近にひかえPちゃんをどうするかを話し合ったとき、必死で考え、言葉を振り絞り、涙を流し、顔を真っ赤にして言い合いました。

涙を流すことや、顔を真っ赤にして怒ることは、カッコ悪いことかもしれませんが、言葉を振り絞ることや、友だちと言い合うことは、勇気のいることかも知れません。

私もそうでした。ときには、6年生に対して自分の思いの全てを言葉にして投げかけたこともあります。涙を流したこともありました。何もできない自分に、何もできない自分を、情けなく感じたりもしました。でも、そんなカッコ悪い自分でも、自分は自分です。取り替えることのできない自分なのです。だから、最後まで付き合っていこうとも少し考えられるようになりました。このビデオを見てもらえれば、おそらく様々な意見があることだと思います。私も、今も考えることがあります。

「自分の出した結論に対して」

「いのちというものに対して」

「そして、教育ということに対して」

みなさんの日々のちょっとした出来事を大切に振り返ってみてください。その積み重ねが、日常の生活に、彩りと潤いをもたらすように思います。そしてそれが、明日を生きていく力になるように思います。しかし、私たちは誰も明日を決めることはできません。だからこそ、おもしろいのかもかもしれません。だからこそ不安なのかも知れません。ただ、教育とは、そんな一人ひとりの過去と未来をつなぐ架け橋となることなのではないでしょうか。

黒、田 恭 史